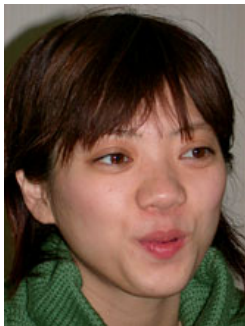


talk! talk! talk! 漫画家・しまおまほさん



漫画家

しまおまほさん

授業中にプリントの裏に描かれた漫画が、口コミで広まりベストセラーに。社会現象にもなっていた「コギャル」を描き話題となった「女子高生ゴリコ」から5年。作者・しまおまほさんは今では若者のサブカルチャー界では欠かせない存在となっている。ゴリコはどこでどのように生まれたのか？独特の感性を持ち、写真家の両親を持つ彼女の目には「写真」はどう映るのか？多方面で活躍するしまおさんに、ゴリコ誕生の話から、写真の話まで幅広く語っていただいた。

プロフィール

1978年東京生まれ。高校2年生のとき、授業中にプリントの裏に描いた漫画「女子高生ゴリコ」が口コミで都内の女子高生の間に広まり、大ブームとなる。ついにはそれがマスメディアに発掘され、1997年秋に扶桑社より出版されベストセラーとなった。昨年には文庫化もされている。その後様々なメディアで活躍を続け、「relax」（マガジンハウス）、「H」（ロッキング・オン）など、多方面の雑誌で文章にイラストなどを駆使したページを展開して若者に圧倒的な支持を得ている。現在は月に5〜6本の雑誌連載を持ち、他の著書には「タビリオン」（ブルースインターアクションズ）がある。今年3月に多摩美術大学を卒業。両親は写真家の島尾伸三、瀬田登久子。祖父は「死の棘」で知られる作家・島尾敏雄。

皮肉と憧れの入り混じった愛すべきキャラクター「女子高生ゴリコ」。「少し退屈な高校生活の中でのストレス発散でした」

今やしまおさんは月に何本もの雑誌連載を持つなど大活躍されていますが、そんなしまおさんの最初の作品が、有名な「女子高生ゴリコ」ですよね。昨年は5年ぶりに文庫にもなりましたね。

そうですね。ちょうど5年前ですね。描き始めたのはちょうど高校生でしたから。

ちょっと古い話になりますが、またさかのぼって「ゴリコ」の誕生秘話をお聞きしたいのですが、もともとのきっかけが、授業中にプリントの裏に描いたのが始まり、というのは本当なのでしょうか？

そうですね、その通りなんです。授業中、本当にひまで（笑）。最初に授業中に漫画を描くようになったのは中学生の時に、その時描いていたのが「ゴリオ」という男の子が主人公の漫画だったんです（笑）。それからしばらくして高校2年生の頃に、昔、授業中に漫画を描いていたことをふと思い出して、「女子高生ゴリコ」を描き始めました。

当時はルーズソックスとかが大流行していて、いわゆる「コギャル」の全盛期だったんですよね。だから、「じゃあ、「ゴリコ」でコギャルを描いてみようかな」と（笑）。なぜ「ゴリオ」「ゴリコ」という名前にしたのかは全く覚えていませんけど、自分なりにそれが面白かったんでしょうね（笑）。

「ゴリコ」は授業中に先生の目を盗みながら描いていたのですか？

そうですね。描く授業も大体決まっていたからね（笑）。たしか世界史、古文はいつも描いていたなあ。

それは、嫌いな授業ですか（笑）？

嫌いな授業というか、先生がほとんど注意しない授業や、あまり質問とかをされない授業ですね。だから、すぐあてられてしまう数学とかは絶対無理でした。

当時はゴリコのような「コギャル」が大ブームでしたが、しまおさんご自身はどんな高校生だったんですか？

そうですね、見逃してくれたことを感謝しないと（笑）。

では、世界史や古文の先生が厳しい先生だったら「ゴリコ」は生まれていなかったかもしれないですね。

私自身は、「ゴリコ」とは全く違う高校生でした。その頃は、やっぱり私の学校でも「コギャル」という感じの子が本当に多かったんです。私服の学校だったのに、みんな中学校時代の制服のスカートと短くして、ルーズソックスをはく、という感じでわざわざ制服を作って着ていたし、ちょうど「バラバラ（※注1）」もはやっていましたね。

でも、私はそういう子たちとは全く興味の方向が違ったんです。学校にも私服で行っていたし、みんなとは見るテレビ番組も、読む雑誌も、趣味も違う、という感じで、当然話題も全く合わないので、学校には気の合う友達がほとんどいなかったんです。授業中に「女子高生ゴリコ」を描くことは、ちょっと退屈な高校生活の一つのストレス発散でもありましたね。

では、実際にしまおさんがいわゆる「コギャル」だったわけではなく、周りにいる女子高生を観察して、「女子高生ゴリコ」を描いていたのですか？

そうですね。だから、最初は結構、「なんだ、あれは？」っていう皮肉の意味もこめて描いていました。でも、そのうち「ゴリコ」に対する愛着も出てきて、途中からはキャラクターもだんだんけなげな感じのかわいい路線に変えていきました（笑）。

描いているうちに少しは自分に近い性格も入れたりしましたか？

自分がやりたくてできないことを「ゴリコ」に漫画の中でやらせる、ということはありませんでしたね。

例えば、どんなことでしょうか？

ルーズソックスももちろんそうだし、合コンに行ったり、デートしたり、クラブに行ったり、DJの彼女を作ったり（笑）。だから、やっぱり私もちょっとは憧れていたんですね。周りの「コギャル」の子達の世界に。

でも、だからといって「コギャル」の子が不良だとか、不真面目だと思っていたわけじゃないんだけど、それでも自分とはあえて一線を置いていたのは、やっぱりプライドもあったのかな、と思います。簡単に言うと、自分ではできないことをゴリコに経験させていたということですね。



『女子高生ゴリコ』（扶桑社／本体952円＋税）もともとは、高校の授業中にプリントの裏に描かれたマンガのコピー本でした。当時流行りのコギャル（なぜか、鼻毛がはみ出していますが）であるゴリコが主人公。「ゴリコ、最近暇すぎ〜」などとぼやきながら、街で学校でかならず大失敗。そんなマンガが女子高生の間で瞬く間に口コミで広がり、ベストセラーになったマンガです。（表紙より）



卒業式に袴を着けました。となりは恩師の鈴木志郎康先生。

そのようにしてしまおさんが自分とは異なる高校生活を描いた「女子高生ゴリコ」は、どのようにして広まっていったのでしょうか？

私は自分の高校では友達が少ないんですけど、高校2年から美術の予備校に行くようになって、そこで初めて友達がたくさんできました。予備校には、私と同じ感覚を持った、同じ価値観の子がたくさんいて、その子達と遊ぶことによって、私の高校生活も急に楽しくなりました。それまではモヤモヤした気

持ちは漫画を描くことで発散させていたけど、だんだんそんな必要もなくなってくるくらい。そんな時に、その予備校の友達に、それまで描いていた「女子高生ゴリコ」をコピー本にしたものを見せたんですよ。そうしたら、みんな面白いと言ってくれて、ちょっとした騒ぎになりました(笑)。それからその子達がそれぞれ自分の学校に持って行って、そこでまた評判になって、という感じで、自分の高校とは違う場所でどんどん広まっていったんです。

そしてついには本になり、ベストセラーとなったのですね。

※ パラパラ=ユーロビート調の曲に合わせて、集団で同じ振り付けで踊る踊りのこと。



学校の卒業展のパーティー。その場の雰囲気を楽しみながらパチパチ撮った写真です。

「ゴリコ」は長く会っていない懐かしい昔の友達。「今は、今の私の作品を見て欲しいです」

普通の高校生だったしまおさんが「女子高生ゴリコ」によって一躍有名になったわけですが、そういった突然の環境の変化にとまどうことはありませんでしたか？

それはあまりなかったです。そうなる気がしていたらちょっと言い過ぎかもしれませんが、「ゴリコ」は自分でも面白いと思っていたので、どこかで絶対ウケるはずだ、と思っていたんです(笑)。だから、人気が出てきた時は、もちろん嬉しかったけれど、「やっぱりな」という気持ちもありましたね。

今思うと、その時に「ゴリコ」に興味を持ってくれた人が必ずしもみんな同じ感覚で受けとめていたわけではないような気がするんですけど、でも逆にそれがいい結果につながったんだと思います。

当のご本人はわりと冷静な目で「ゴリコブーム」を受けとめていたのですね。しまおさんは、「女子高生ゴリコ」を描く前から、今のように漫画や文章を書くことを仕事にしようと思われていたのですか？

その頃は特に考えていなかったですね。ただ、小さい頃の夢は漫画家だったんですよ。でも、その頃にイメージしていたのは、ベレー帽をかぶって、周りにアシスタントがいっぱいて、締め切りにいつも追われているような「○○先生」といった感じの漫画家像だったんです(笑)。だから、そういう意味では今の状況は「小さい頃の夢がかなった」というのとは少し違いますよね。今は、本当に自然な流れでいつのまにかたどりついたという感じです。

ゴリコが生まれてから5年経ちましたが、しまおさんの「ゴリコ」に対する気持ちに何か変化はありましたか？

特に変化はないですね。「ゴリコ」は長く会っていない友達でもあり、やっぱり自分が残した昔の作品という感じがですね。懐かしさと一緒に少し恥ずかしい気持ちもあるんですけど、それはそれでいいかな、と思っています。でも、ゴリコはあくまで私の過去の作品なので、今は、私が今やっていることの方をたくさんの人に見てもらいたいですね。



我が家のミケちゃんも、私が撮るとこのとおり。

限界があるはずなのに、無限でもある「写真」の世界。「その人の気持ち、センスを感じる写真にはハッとさせられます」

しまおさんの2冊目の単行本「タビリオン」には、旅先のたくさんのスナップ写真が掲載されていますよね。普段から写真を撮るのはお好きなんですか？

本当に記念写真としてですけど、写真は好きですね。最近はデジタルカメラを買ったので、いつもかばんに入れて持ち歩いています。その前も、レンズ付きフィルム(※注2)をいつも持っていましたが、旅行に行くときだけでなく、カメラは常に持っていますね。

どんなものを撮られるんですか？

私はあまり物や風景は撮らないですね。ほとんどが人物です。友達を撮ることが多いかな。普段は絵を描かれることが多いと思いますが、写真を撮影しながら「あ、これを絵に描こう」と思うことはありませんか？

それは全くないですね。私にとっては、絵と写真は全く別のものです。自分が撮影するものに関して言えば、私にとっては写真って「作品」とか、「芸術」ではなくて、あくまで楽しみとして、気軽に撮るものなんですよ。だから、写真を撮る時にはあまりこだわりもなく、友達を撮ったりして楽しみ、その写真を見てまた楽しむ、といった感覚ですね。

しまおさんにとって写真は「記念」ですか？

記念というか、日記みたいな感じですね。写真を見ていると、その切り取られた部分だけではなくその前後のことも思い出しますよ。だから、私にとっては思い出を残すものとしてすごく大切なものだし、大好きですね。

しまおさんのご両親は写真家ではないしやいますが、「作品」としての写真をご覧になる機会はやはり多いのでしょうか？

はい。両親の写真も見ますし、写真家の方と仲良くなることが多いので、写真はよく見ますね。写真展に行くこともよくあります。

どんな写真を見るのがお好きなんですか？

特に好みはありませんが、時々見ていてハッとするような写真に出会うと「すごい！」って思います。絵は、世の中にないものや目に見えないものを描くことができるけど、写真って、世の中に存在しているものしか撮れないですよね。だから、同じ場所、同じ構図で撮影したら、どの人が撮っても全く同じ写真になってしまうんじゃないか、ついつい思ってしまっで、私は写真ってすごく限界があるもののように感じるんです。私が今は写真を芸術としてやろうと思わない理由もそこにあるんですよ。

でも、そういう限界を感じさせないで、その人の視点や気持ち、センスの面白さなんか伝わってくる写真を見ると感心してしまっし、そこが写真のすごいところなんだな、と思いますね。

写真を撮ったり見たりするうえで、ご両親から影響を受けていることはありますか？

うーん、特にないとは思いますが。でも、私が写真家の方々と仲良くなるってというのは、もしかしたら両親が写真を撮っていることと関係しているのかな？なんて最近思ったりしますね(笑)。そんなことありえないと思っていたんですけど、いろんな人と一緒に仕事をしているのに、なぜか気が付くといつも写真家と仲良くなっているんですよ。

やっぱり、何かお互い引き寄せるものがあるんでしょうかね？ ご両親が写真家だと、やはり小さい頃からカメラは身近な存在だったんですか？

そうですね。私も1歳くらいの頃からハーフサイズのカメラ(※注3)を持たされて、いろいろ撮っていたらしいんですよ。その頃の写真もどこかにしまっておくはずなので、今見たらきっと面白いんじゃないかな。



『タビリオン』(ブルース・インターアクションズ/本体1300円+税) いろんな旅をして、生きていることが全部旅だと思えるようになりました。時間の中、人の中、自分の中を毎日旅している気分になりました。その気分と絵と文章にして透視みたいに昔の旅を外に出して新しい旅を中に入れるようにしました。でも昔の旅は捨てないでもキラキラ紙の上で光るといい。そんな気持ちで旅リオンをつくりました。題は単なるダジャレです。(本文より)



大阪に行ったときに食べたケーキは、なんと鳥カゴに入っていました。私の心に深く刻みこまれた素敵な演出でした。

※ 注2 レンズ付きフィルム=フィルムにレンズ、シャッター、フラッシュなどが付いた簡易カメラ。

※ 注3 ハーフサイズ(シネサイズ)カメラ=画面サイズフォーマットを通常の24×36mmではなく17×24mm前後にすることで、より多い枚数の写真を撮影できるカメラ。画質や規格の違いから今ではあまり使用されなくなったが、一部愛好家には根強い人気がある。

写真家の娘は被写体のベテラン！？「その写真の主人公になれる被写体の立場はすごく面白いです」

昨年はお父様の島尾伸三さんが、しまおさんの子供の頃の写真をまとめた本を出されましたよね。

そうなんです。「まほちゃん」という写真集です。でも両親は今ではもう私の写真はほとんど撮らないんですよ、撮っても面白くないらしくて(笑)。やっぱり小さい子の方が被写体として面白いみたいですね。

しまおさんは、お仕事でもたくさんの写真家の方の被写体になっていますよね。小さい頃から両親の被写体であり続けたことが役立っているのでは？

それが、私も、撮られ慣れていると思っていたのですが、やっぱりどうしても緊張しますね。ガチガチになっちゃったりします(笑)。

でも、気心の知れている写真家の友達に撮ってもらうと、照れちゃう部分もありますけど、すごくやりやすいですね。それにその人が私をどういう風に見ているのかがわかって、新鮮で面白い気分になります。被写体になる時って、写真の中で自分が主人公になれるからとっても気分がいいですね。

しまおさんは被写体として主人公にもなれて、自分で漫画の主人公も描ける。両方体験できますね(笑)。最後にこれからやってみたいお仕事は？

まだイメージはありませんが、また本を出したいですね。前作の「タビリオン」も、もう2年前ですし、そろそろまた新しい本作りをしたいな、と思っています。本を1冊作るのは、すごく大変な作業だけど、本当に楽しいんです。それから、展覧会もやってみたいですね。まだまだやりたいことがいっぱいあります。

新しい作品、楽しみに待っています！



[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.